



大連交通大学・国際文化交流学院 留学生 森野昭

大連に語学留学して早、2ヵ月少々が経ちました。

余暇の時間を利用して、この地の風物に触れるのも楽しみです。

4月末からのゴールデンウィークを利用して、遼東半島の最先端にある「旅順口」に留学生仲間の3人と一緒に日帰り観光をしました。

大連市より高速観光バスで小一時間ほどで、旅順口につきました。今でも天然の良港で、中国海軍の基地ですが、かつては軍港として戦略的重要性から日本とロシアが争ったところ。その最も有名な日露戦争の激戦地を訪問しました。

日露戦争当時、旅順口は居住地としては重要性がなかったはずですが、今や人口20万人の地方都市に変身しておりました。気候温暖な海浜都市なので、別荘地にもなっているらしい。

■白玉山

バスターミナルから、まず近くの「白玉山」へ歩いて登りました。

山頂に乃木希典と東郷平八郎が寄進して建てた記念塔があります。階段を登れば塔頂に行けますが、皆50歳半ば以上の高齢者ばかりです。足に自信がないので、外から眺めるだけにしました。

次に、この塔の背後に行くと、旅順港を眺める展望台があります。





■旅順港

素人の私が見ただけでも、この港が軍港として重要であることがよく理解できます。上の写真にあるように、港口は狭く、港内は山に囲まれており、ひとたび港内に入り込めば、海側からの攻撃を受けることのない安全地帯と申せましょう。日露戦争当時、ここはロシア帝国が清国から租借した太平洋艦隊の基地でした（もう一つはロシア領のウラジオストック港）。

東郷平八郎の日本連合艦隊は、ロシア艦隊との海戦に失敗し、港内に逃げ帰った太平洋艦隊への対処法に手を焼きました。旅順港口の閉鎖作戦にも失敗した東郷艦隊は、やがて欧州から万里の波頭を越えてやってくるバルチック艦隊との一戦までに、太平洋艦隊を殲滅しておかなければならない危機的状況に追い込まれました。

そのような時代背景に無関心の中国人観光客には、ここの眺めは“風光明媚な港”としか思えないでしょう。



■乃木将軍の第三軍の激戦地

背後の嶺々に堅固な要塞をつくって旅順港を護るロシア陸軍への攻撃を担当したのが乃木将軍麾下の第三軍でした。嶺を占領できれば、そこから旅順港を見下ろすことができるので、目視で背後からの28センチ榴弾砲で港に停泊しているロシア太平洋艦隊をたやすく殲滅できるわけです。

大激戦地である「203高地」と「東鶏冠山」、そして日露講和の地「水師営」は、旅順口市より遠隔地にあるために、タクシーをチャーターしました。中国ではタクシーの運転手と価格交渉が不可欠です。相手の言い値200元(3,300円)をいくら値切れるか？ これまでの中国滞在中の旅行では同行してくれた教え子に任せ、私は交渉を横から眺める気楽な身分でした。中国人学生は日頃はおとなしい女学生でも、金のことになると“たくましい中国女”にヘンシ〜ンします！

しかし今回同行した3人の留学生は初級クラスの仲間で、中級クラスの授業にも出ている私がまだましな会話力があるはずだと彼らから頼りにされています。といっても、私はまだ十分には中国語の会話ができないのですが、三人の前では見栄をはって頑張らなければなりません。が、力不足で180元までにしか値切れませんでした。

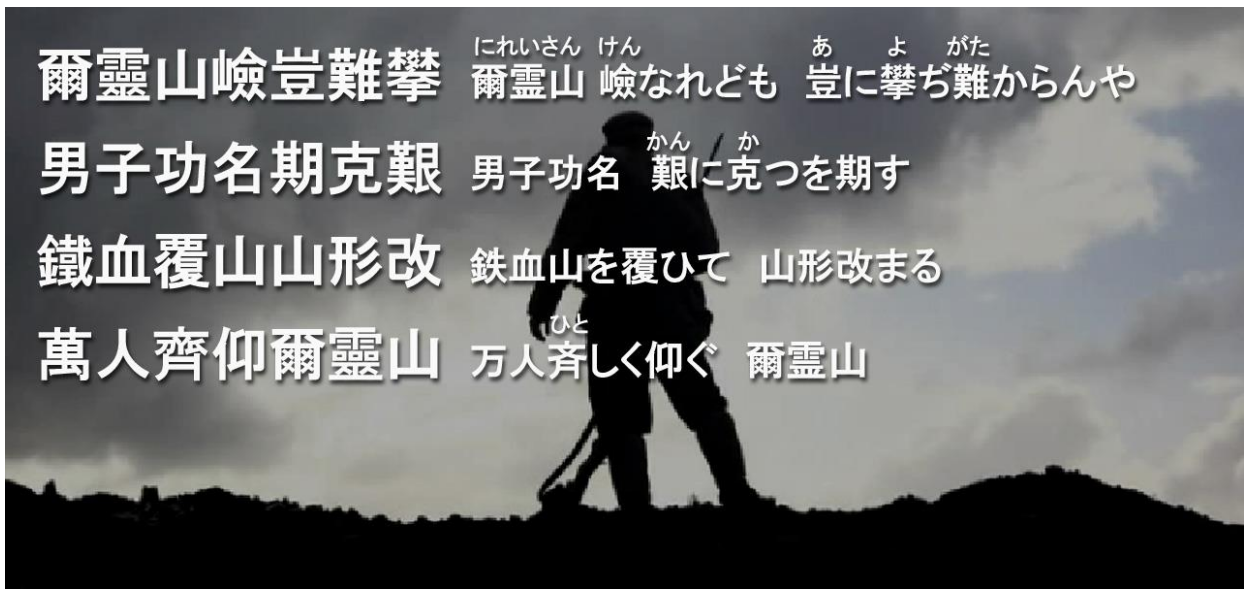
まず、203高地へ行きました。入山料(一人30元×4人および駐車代10元)を払って、坂を20分ほど登ると山頂に達します。まず、乃木将軍の有名な漢詩(爾靈山)を記した慰霊塔に行きました。この塔は203高地に散在する弾丸と薬莢を集めて弾丸型に鑄造したそうです。この塔の先端は文化大革命で破壊されたが、現在は修復されているとのこと。



「爾靈山」慰霊塔を前に私と三人の学友

(上) 28センチ榴弾砲 (下) 「爾靈山」慰霊塔と重砲観測所への標識

乃木将軍がこの戦場で詠んだ「爾靈山」(七言絶句)を下に紹介します。



わたしは、203 高地に立ち、手帳に記したこの詩「爾靈山」(203、なんじの靈の山)を朗誦して、英靈に祈りをささげました。

203 高地は登山口から山道、また山頂の記念物をつなぐ道が整備されておりました。この山頂まで日本軍兵士が道なき斜面を敵の機関銃や砲弾が雨あられのように降りそそぐ中を突進したのですが、昔日の面影はありませんでした。旅順要塞攻略作戦で、乃木軍の将兵が実に6万人も死傷(内死者1万5千)したと言われています。

参考のために 203 高地を麓から撮った当時の写真を下に示します。この方が、戦いの様を想像できるのですが、この 203 高地の頂上に先ほどまでいたとは思えないほどです。

このあと「水帥營」に行きました。かつて唱歌にも歌われた乃木将軍とステッセル将軍が終戦の調印をしたところですが、しかし、何の変哲もない農家の家屋で、しかも家は復元されたものであり、調印に使われた机もあとで付け加えたものだそうです。入場料 40 元を払って見学するほどの価値がなさそうなので、門前で眺めただけで、先を急ぎました。



麓から眺めた 203 高地



水帥營会見所(復元)



日露の終戦協定が結ばれた「水帥營」(これら三枚の写真はインターネットから引用した)

【エピソード1 ～終戦調印式～】

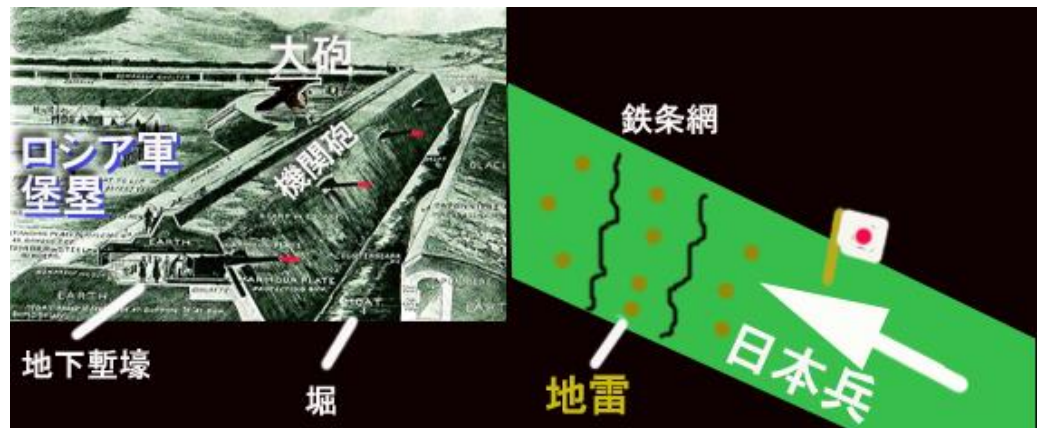
乃木將軍は敗將のステッセル中将に帯刀を許すなど、武士道精神で遇した。これは当時の将官クラスに士族出身者が多く、武士道精神がまだ日本に残っていたからだろう。ステッセルは旅順要塞の早期開城の責任を問われて、軍法会議で死刑宣告を受けたが、後に禁固10年に減刑された。それには乃木將軍の助命運動が与っていたという。乃木こそ日本最後の武士道精神の具現者であったと評価する日本人もいる。

しかし、旅順要塞攻撃の戦術については、多数の戦死者を出すのはやむを得なかったとする意見と、乃木が愚将で多くの将兵を無駄死にさせてしまったと批判する（司馬遼太郎がその代表）意見があります。いずれにしても乃木は多くの将兵を死なせてしまったことを悔いており、戦没者遺族を見舞うことを戦後の任務としていたという。その乃木の思いを籠めた漢詩をこのレポートの最後に記載する。

■東鷄冠山北堡

ロシアは清国から旅順を租借し、1900年、旅順の東側の半永久的な防御線としてここに堡壘を建設しました。天然の岩にコンクリートと石、そして泥土で覆って造られ、内部の構造は複雑で、司令部、兵舎、弾薬庫、治療室、台所などの周りに胸墻、側防窠室が配置され、堡壘は5角形をしていた。堡壘の周囲には堀があり、堀の外の斜面には高圧電流が流れる鉄条網を架設し、さらに地雷も埋めてあるという堅固な守りであったようです。

このために、乃木軍は東鷄冠山への正面攻撃で苦戦し、多数の戦死者をだしたといえます（この堅壘は203高地陥落後によりやく墮とすことができた）。



慰霊塔



ロシア軍の大砲



日本軍の爆破で破壊され側防窺室跡（窺室とは「穴蔵、、囲い」の意だが、ここまで達した日本兵をロシア兵は窺室の銃眼から射殺した）

地下壕に至る階段

ここの外壕の壁には銃痕が多数あり、激しい戦闘が行われたことを生々しく物語っている。周辺の大地にも塹壕が山を取り巻くように造られている。

（インターネット <http://www.chibaphoto.jp/dairen/dairen2.html> より）

右の塹壕（兵士の宿舎？）は二階建てだったそうだが、崩れて、今は一層になっています。私はここに入ってみたかったが、場所がわからなかったのので、インターネットの説明と写真を引用しました。



ここ東鶏冠山北堡も観光コースとしてよく道が整備されていました。それだけに、当時の生々しい姿がなかなか実感できないのはヤムをえません。

【旅順日露戦争陳列館】

日露両将の写真や日露戦争の旅順の立体模型、当時の銃弾や砲弾などが展示されています。「旅順口区国防教育基地」ともされ、中国国民に対する愛国教育の場ともなっており、年間約 100 万人の中国人が訪れるとのこと。日割り計算すると、一日あたり 2,700 人となるが、本当でしょうか？ 我々の訪問は日曜日であったが、周辺は閑散としていました。

【エピソード 2 ～東鶏冠山に赤十字旗あがる～】

以下は乃木将軍の外交折衝顧問という立場で従軍した志賀重昂の『大役小誌』による話である。203 高地の攻防がクライマックスに達した 1904 年（明治 37）12 月 3 日、敵味方の屍におおわれた東鶏冠山の北の砲壘に一本の赤十字旗が立ち、全戦線の重砲声がぴたりと止んだ。そして、敵味方双方がそれぞれの死体を收容しようという話がまとまり一時休戦が成立したという。

両軍の使節団は赤十字のもとに歩み寄り、握手を交わし、贈り物をして互いの健闘と称え合っ

た。両軍がそれぞれの戦死者を搬送しおわると、双方の将兵は握手を交わし自軍陣地に戻った。赤十字旗が降ろされると、とたんに両陣営からさかんに銃声がわき起こった。当時の日露両軍には、まだ戦場のルールとかマナーを守る一面があったということだ（インターネット情報をそのまま記載しました）。

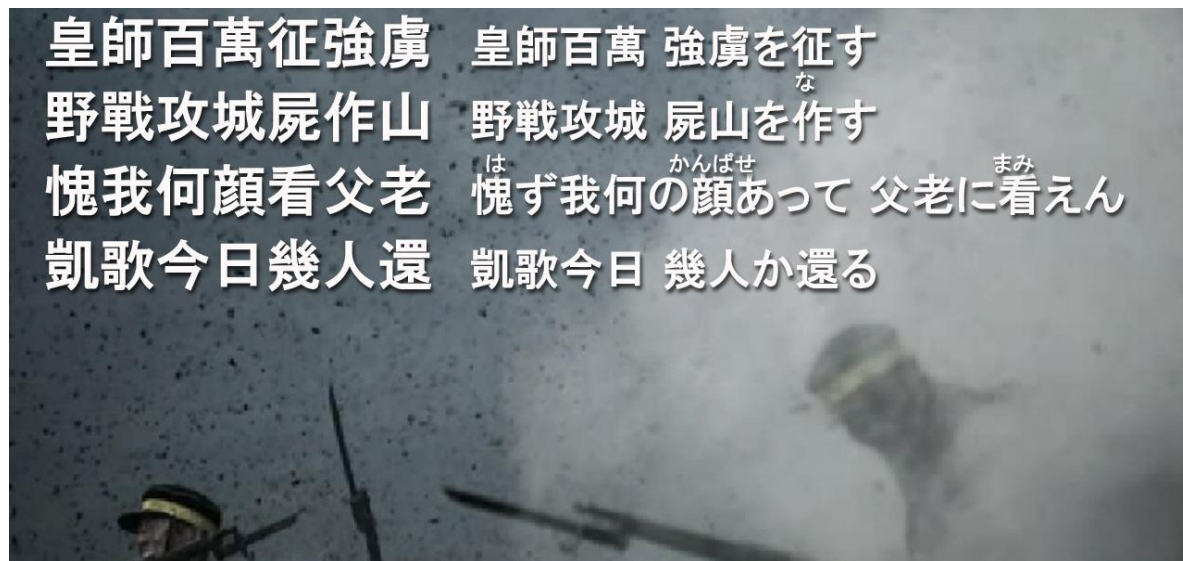
<http://www.bell.jp/pancho/travel/china-2/sept03_higasi_keikanzan.htm>

こうして、203高地と東鶏冠山北堡壘の訪問を終えて、午後三時過ぎに、旅順口バスターミナルに戻りました。

私は過去8年間中国に滞在中に、あるときは風光明媚なところへ、あるときには歴史的遺産へ、またあるときには漢詩の創作現場へと訪ね歩き、いずれも魅力ある観光地でした。しかし、今回の訪問地では物見遊山の気分にはなれませんでした。

我々が本日訪問したところの観光客は、わずかに日本人もいたものの、そのほとんどが中国人でした。日露戦争は日本人にとって、大国ロシアに勝利した誇るべき民族的大事業だと思うのですが、中国人にとっては外国の軍隊に自国領土を荒らされただけの迷惑なことでしょう。中国人がどのような思いでこれらの観光地へ来、どんな感想をもったのでしょうか？ 気になるところです。

最後に、乃木将軍のもう一つの詩「凱歌」を紹介して、このレポートを終えます。（了）



（追記）午後三時過ぎに、日露戦争戦跡の訪問をおえて旅順バスターミナルに戻ったとき、そこから歩いて15分ほどのところに「万忠墓記念館」があった。この記念館の見聞と考察については、別途記述することにする。